



ぜんこくのうぎょうきょうどうくみあいちゅうおうかいちようしよう
全国農業協同組合中央会会長賞

祖父の想いを継いで

茨城県茨城大学教育学部附属中学校三年

丸岡 奈央

私の母の実家は祖父の代まで専業農家でした。祖父は私が物心つく前に他界してしまいましたが、本当に米作りが好きな人で、病氣と闘っている最中も常に田んぼを気にかけていたと聞きました。

私達家族は、米作りの中でも特に人手が必要な作業工程である、春の種まきと田植え、秋の稲狩りと籾摺りのときに手伝いに行きます。まるでキャンプか登山にでも行くような持ち物と服装、お弁当まで作って出かけるので、私達子供はまるでピクニックに出かけるような気分になります。毎年恒例の楽しみの一つです。

朝早くから身支度し、自宅から車で二時間以上の移動時間を経て、いよいよ到着。楽しみとは言ってもここから先は「仕事」です。

種まき、田植え、稲刈り、籾摺りのどれをやるにしても、母の実家の家族と私達家族の全員でそれぞれの役割をこなします。全てが流れ作業なので、誰も手を抜くことはできません。

よくニュースや報道番組などで、農家の高齢化や担い手不足などの話題を耳にします。母の実家も例外ではなく、長く祖父と祖母の二人で全ての作業をこなしていたようです。私の父や母が本格的に農作業の手伝いを始めたのは、祖父が病氣で入院したのが大きなきっかけで、それ以来毎年の恒例行事になりました。

手伝いを始めた頃は、私はまだ幼稚園にも入っていないような年齢だったのですが、子供同士で遊ぶ事が楽しかったということ以外はよく覚えていません。しかし、戦力として手伝いに参加するようになった頃から「こんな重労働を一人で全部やっていたなんて、どんなに大変だったのだろ

う。」と感じるようになりました。

母の実家の田んぼ周辺には、近所の農家さんが管理している田畑が広大に広がっています。田んぼに向かうと、農作業をしている沢山の方に挨拶をするのですが、高齢の夫婦二人で作業をしていることがほとんどで、私達のように大人数で作業をするという農家は本当に少ないです。

「お、今年も来たなあ。楽しくやれよ。」

近所のおじさん達は本当に親切に声をかけてくれます。祖父が亡くなってからは、何かトラブルが起きると対処方法が分からず、近所の方達に助けてもらうことがあります。時には、助けを乞う前から田んぼに着いたらある程度の作業が終わっていることも珍しくありません。祖母に聞くと、そうした方々は皆、祖父の古くからの友人や、苦しい時に助け合いながら苦難を乗り越えてきた方なのだそうです。

もう祖父が亡くなってから十年以上経っているのに、今でも変わらずに助けてくれる。こうした農家同士のつながりを見ると、農作業は近所や親戚を含めて皆で協力し合うことで成り立ってきたものなのだと実感します。そして、きっと祖父も沢山の農家さんを助けてきたのでしょう。

米作りは今でも、伯父が兼業で続けています。平日は勤めがあるので、農作業は休日返上での業務になります。本当は疲れているだろうし休みたいのだと思うけれど、米作りはずっと同じ方法で続けています。祖父や祖母が大切にしてきた美味しいお米のできる田んぼを守って行きたい。自分の作ったお米を家族に食べさせたい。様々な思いからお米を作り続けているのだと思います。

私達が手伝いに行くと、賑やかに元気が出ると言ってくれます。わざと泥にまみれながら土をならしたり、膝まで水につかり歌いながら苗箱を洗ったり。大人達は、そんな私達を見ながら笑顔で作業をしています。

「おじいちゃん、見ていますか。」

今年もきつといいお米ができるよ。